

《総合診療ブックス》

今日からできる思春期診療



編：原 朋邦，横田俊一郎，
関口進一郎

A5 頁192 2007年
定価 3,990 円(本体 3,800 円+税 5%)
[ISBN 978-4-260-00343-8]医学書院刊

「ベツニ」「ビミョー」など言葉を発してくれるならまだしも、何と声をかけても俯いてオホーツク海の如く冷たく「……」ばかり。私のかける声はポカリポカリと浮いている流水のよう。診察している自分のほうがドギマギしてしまう……。

思春期の子どもの診察は各年代の中で最も苦手としている。さりとて興味が無いわけではなく、何とかしたいと切望している年代でもある。なぜなら彼らは無表情ではあるが、私の言葉がちゃんと耳に入っているし、聴診をすれば頻脈・動悸があったりするのである。この複雑怪奇で興味深く、愛らしい思春期患者の診察に頼もしい助っ人ができた。

本著は見たところコンパクトだが、一気に読破してしまうという本ではない。とにかく1頁、1頁が凝縮されていて、じっくり味わい、アンダーラインを引き、付箋を貼っていく本である。

本著は「思春期診療キーワード」から始まる。総論的に思春期の特徴を表す言葉のていねいな解説にまず引き込まれる。「思春期診療においては、身体面と心理社会面を総合的に評価して、併存症(Comorbidity)の有無とそれらの関係についての確に把握」し「優先度を考えて取り組む」というセンテンスは、自分がわかっているようでわかっていなかった診療への姿勢を正された気がした。

「思春期のとらえ方・接し方」のうれしくなる

ような明快な説明に続き、いよいよ各論の「思春期に気になる症状・所見」の提示となる。私たちが診療所でよく出会う子どもたちである。「問診のポイント」「診察のポイント」「アセスメント」「マネジメント」とていねいに導いてくれるので、本とともに考えていく体験学習ができる。そして最後の「Caseの教訓」と「Q & A」でも大納得!!

症例は多方面にわたるが、私の不得意な思春期の統合失調症(若年性統合失調症)は、しっかり理解していないと特異な不定愁訴として見逃してしまい、判断の遅れから患児の不利になる事態を導く恐れがあることを肝に銘じることができた。またさらに精神科を受診してもらうまでの“保護者の理解のための下準備の方法”はより具体的でありがたいアドバイスであった。

共著にもかかわらず、本全体がきちんときめ細かく順序だっているの、読み進むとともに自分の中で理解が深まりスキルアップしていく実感を持つことができる。読み終えた今、私の頭の中はとてとても収納しやすい整理棚が用意され、順序よく引き出しのラベルまで貼っていただいたような爽快な気分である。

本著における一貫した「本人の尊重」と「保護者への助力」の姿勢は、共感とともに思春期診療へのモチベーションを上げていただいた。この一冊は、言うまでもなく早速思春期に関する私のバイブルとなり、今後手元に置き続け、幾度となく紐解くことであろう。

「Clinical Pearls」(すてきなエッセイ風の項が時々真珠のように光っている)の中のある一節は私の耳に心地よく残り、しかも心に深く重く刻まれた。私はこの一節が本著を総括しているように感じる。「外来は健康問題を解決するとともに、人を育てる、人が育つ、人を癒す場でなければならないと考えている」